

向い山（八幡山）や三峰の砦に烽火があがって、ふだんはのどかな河和田の谷が、にわか騒がしくなった。百姓たちは、裏山のかくれ穴に女ごどもをせきたてて家財や食べ物をはこびこんだ。

この前入った知らせでは、義景様はじりじりと信長の軍におされて後退している。寝返った武将もいるという。

助生田城主の塚田五郎左衛門は、館に部下を集めた。この谷に入り込んで来る敵は、別司の真田源五郎と組んで討ち取らねばならない。一乗谷は朝倉氏が城下町を築いて百年の間、まだ一度も敵にふみ込まれたことはなかった。どんなことがあっても、ここから一乗谷にせめ込ませてはならない。

五郎左衛門は、戦つにはまだ幼すぎる我が子をよろいの胸にだきよせた。見つめ返す澄んだ瞳を見ていると、戦さの道づれにするにしのびなくなつて、ふだんから目にかけていた百姓の助

太を呼んだ。

「この子を人をあやめる武士にはしたくない。どうかお前のようなかしい百姓に育てておくれ。」と頼むと、

「さあ、行くぞ。」

と部下に声をかけた。

その時、一発鉄砲の音が谷にこだまし、実りはじめた稲穂をわけて、西から敵が姿をあらわした。必死にむかえ討つ五郎左衛門らに南の榎尾坂からも敵が攻めてきた。

はさみ討ちにあつた五郎左衛門は、覚悟をきめた。部下に、

「闇にまぎれて落ちるところまで落ちのびてくれ。これ以上村を荒らしてはならん。」と告げて、一人榎尾坂で切腹して果てた。

落ちのびた部下が住みついたのが、今の福井市上助生田、下助生田だという。